



1 級都市天津に1.5級の天津人

もぎ のりえ
茂木 規江 ●天津理工大学 講師

昨年11月中旬、「天津甘栗」の本場、中国天津市に来たときには、葉の落ちてしまった街路樹の中に紅葉の名残を残すものがわずかにある殺風景な景色だった。春の訪れとともに、レンギョウ、モクレン、カイドウ、桃、スミレ等が眠りを覚まされたように一気に花開き、町に彩りを添えている。それに刺激を受けたように路上で商売をする人も増え、街全体も活気づいてきたようだ。

広大な国土に大人口、多民族となると、日本の様な秩序や規則で人を統制するのは難しいだろう。かつて中国人と言えば自転車というイメージだったが、今では皆が自動車に乗っていると思うほどの車社会だ。天津では人より車が優先で、信号に従い横断歩道を横断中の歩行者めがけ、そこをけそこのけと、クラクションを鳴らしながら左折車が突っ込んでくる。団地前の4車線道路の内1車線は、常に停車中の車や客待ちタクシーに占領されており、歩道や一方通行路を当たり前のように逆走する車や原動機付き自転車に誰も動じない。バスも乗用車もクラクションを鳴らしながら、隙間があれば我先にと進む。譲り合いという観念はないのかと中国人に尋ねたところ、「譲り合っていたら即渋滞になってしまう。」という答えが返ってきた。バス停には時刻表などなく、いつ来るか分からないバスを列も作らず待つ。バスは停留所付近に止まるので、停車したら我先にと乗り込

まないと乗り遅れ、次を待つことになる。「郷に入れば郷に従え。」ここでは、いい意味でも悪い意味でもおおらかにならざるをえない。

天津市は中国中央政府の直轄都市、また1級都市とされ、人口は1,100万人を超す。市中心部には、かつて9か国の租界があった名残をとどめる建築物が数多く残され、欧州の一都市にいるような錯覚を覚える。地元の漫才で、天津人は1.5級だとよく自嘲すると聞いた。これは、1級の天津市に比べ天津人は意識面で、他の1級都市に住む北京人・上海人に劣るが、2級都市在住者ほど劣っていないので、その中間をとり1.5級ということらしい。ハードは1級でもソフトがそれに伴わないというのは、ここに来て何度も耳にしたことだ。上海を良く知る人が、「上海では横断歩道を安心して渡れるし、散歩中の犬がこんなに放し飼いになっていることはない。でも上海では天津のような密な人間関係はなかった。」と言っていた。長春から15年前に来た同僚も、「天津人は気さくで親切だ。」と言う。おそらく首都北京や国際都市上海に比べ、天津には昔からこの地に住んでいる人口が多く、大都市特有の「無関心」よりも、良い意味での「田舎臭さ」がまだ強く残っているのではないだろうか。

テレビでは連日、反日感情を煽るようなドラマやニュース番組を放送し、学校でもまた同様の教



育をしているそうだ。このような環境で育ったなら、日本や日本人に対し悪い印象を持っても不思議はない。また、これは日本国内での中国や中国人に対する報道と大差ないと思う。中国語ができない私は、赴任したての1ヵ月間ぐらいは、一人で行動するときには、日本語を使うのを躊躇していた。しかし相手に日本人と分かっても不愉快な思いをすることもなく、用件を理解しようという姿勢をみせてくれるので、今では買い物や公共施設に行っても平気で日本語を使っている。一般の人々がマスコミに同調せず冷静なのはありがたい。

天津に来てから良く思い出すのは、日本に行ったことがある外国人から、「日本人は親切で、優しい。」と聞かされた時に、誰のことだろうと違和感を覚えたことだ。ちなみに手元の辞書には、「優しい — 穏やかで好ましい。思いやりがあって親切だ。心が温かい。」「親切 — 人情があつこと。好意をもって人のためにつくすこと。」と記されている。確かに日本人の紋切型としてはあてはまらなくもないだろうが、これは日本人特有のことなのだろうか。つい先日も2年連続して家族で日本を旅行したという中国人と知り合い、大阪、静岡の人たちは親切だと聞いたばかりだ。日本語がまったく出来ない彼らは、筆談でコミュニケーションをとりながら旅をしたそうだ。その結果、かなりの親日になり、中国と日本を比較し日本の良

い点をあげ、来年もまた日本へ行くと言っていた。そして、1時間ぐらい話をしただけの私を家に招いてくれた。

今いる団地に引っ越して早々、1階に住んでいる初老の中国人女性は、一人で日本から来た私に、何か困ったことがあればすぐに来いと声をかけてくれた。またある日、航空郵便を出そうとして小銭がなかった時に、局員から隣の貯金の窓口に行き、両替するように言われ仕方なく列に並んでいると、2～3分後、見るに見かねた同局員がやって来て私からお札を取り上げ、列を無視して窓口の同僚に両替を頼み、替えたお金を私に手渡し何事もなかったかのように郵便窓口に戻った。この間、局員は始終無愛想、使う言葉は中国語だけだったが、御陰で私は無意味に列に並んで無駄な時間を費やすこともなく、手紙を出せ、また一つ天津式の「親切」に触れることができた。

親切・優しいという概念は、その人の置かれた状況や場所に応じて変化するものであり、日本でよく目にする表面上の親切・形だけの優しさは、「田舎臭い」天津で経験するそれと明らかに違う。洗練されることにより失うものがあるとするならば、天津人はこのまま1.5級でいるべきだろう。